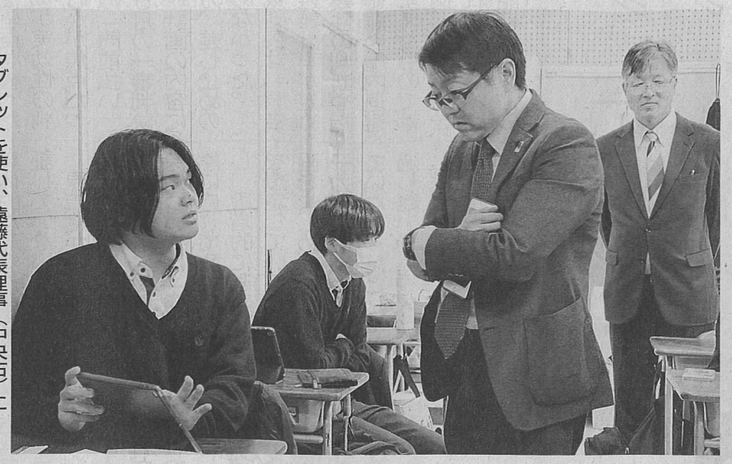
能登復興へ新商品考案

石巻商高生 アイデア柔軟



タブレットを使い、遠藤代表理事（中央右）に商品を紹介する生徒

いかまぼこ　かきはらこ飯

宮城、石川 特産掛け合わせ

石巻商高で商品開発について学んでいる3年生16人が、能登半島地震の復興支援に向け、宮城県と石川県能登地方の特産品を掛け合わせた新商品を考案した。生徒らは19日、県内の食品関連企業が取り組む被災企業応援プロジェクト「みやのとプライド」の遠藤伸太郎さんに発表。「商品化できそうな提案もあった」と高い評価を受けた。

◇

新商品の考案は、同校の授業科目「課題研究」の一環。同プロジェクトには県内の食品関連企業85社が参加しており、石川県内の食材や調味料を使った商品を販売し、売り上げを被災地支援に役立てている。

生徒らは発表に向け、いしのまき元気いちば（同市中央2丁目）を視察するなどして、商品のアイデアを練り上げた。19日は、同校を訪れた遠藤さんに対し、それぞれタブレット端末で商品を紹介した。

生徒らが考案したのは、笹かまぼこに能登町名物の船凍（せんとう）イカの身やイカスミを混ぜ込んだ「いかまぼこ」や、宮城の郷土料理はらこ飯に七尾湾の特産イワガキを盛り付けた「かきはらこ飯」など。

能登町の赤崎イチゴを加工した地酒、仙台みそとブランド牛・能登牛を使った「牛肉のみそ漬け」を発表した佐々木聖時（きよとき）さん(18)は「それぞれの特産品を多くの人に知ってもらうことが石巻、能登両地方のためになる」と話した。

生徒らが柔軟なアイデアで発案した商品について、遠藤さんは「自分では思いつかないようなアイデアを発見させてもらい、商品化が実現できそうな提案もあった。プロジェクトの今後に生かしたい」と語った。

不登校児に学びの場を

来月8日、石巻でシンポ

不登校に理解を深めるシンポジウムが12月8日、石巻市ささえあいセンターで開かれる。市内の有志でつくる任意団体「まずは石巻から『不登校』という言葉をなくしたいネットワーク」が主催する。

テーマは「すべての子どもたちに学びの機会を」。ネットワークのメンバーが不登校の定義や要因など基本的知識について情報提供。フリースクールやホームスクーリングといった全国に広がる学校以外の学びの場や、自治体による支援についても紹介する。

当事者の児童生徒によるトークセッション、参加者同士の意見交換、市内の支援団体の紹介も行う。終了後には当事者の保護者が交流し、情報交換をする場「保護者の会」を開く。

シンポジウムは午後1～3時。定員80人で参加無料。不登校の児童生徒とその保護者、不登校支援に関心がある行政職員や教職員、NPO職員といった福祉・教育関係者などが対象。

事前にメールで申し込む。アドレスはishi.ma.iine55@gmail.com。問い合わせは事務局090（7185）3941。

子ども

河南西中

地元企業の魅力理解

セミナーで進路考える

石巻市河南西中（生徒190人）で22日、全校生徒対象の「キャリアセミナー」が開かれた。生徒らは地元企業の担当者の講話を聞いてさまざまな仕事に理解を深め、自身の進路について考えた。

地元の行政書士や飲食業、保育士ら9人が講師を務め、各教室で講話を行った。生徒はそれぞれ興味のある講師の教室で、今の仕事を選んだきっかけや職場の様子、仕事の内容などの話に耳を傾けた。

同市中央1丁目の生花店「大森花園」の大森憲市社長は花屋の仕事について、一般的なイメージと異なる「体力勝負」の一面もあると説明。「仕事に就くまでに多くの経験をして、大変でもやりがいになる喜び（がある仕事）を探して下さい」と呼びかけた。

3年の水沼さくらさん(14)は「いろいろな職業のやりがいを聞けて、いい体験になった。職業選択をする上で裏方を知る大切さも分かった」と話した。

セミナーは同校のコミュニティ・スクール（学校運営協議会）が主催。石巻ロータリークラブの協力を受け、会員企業から講師を募った。協議会の佐々木哲協働部会長は「生徒には地元にもたくさんの職業があることを知ってもらい、いずれ石巻に根付く人材になってほしい」と語った。

地元企業の担当者（右）が仕事の内容、やりがいについて語った

いんぐりっしゅ喫茶室 ◆383◆

大津幸一さん（大津 イングリッシュ・スタジオ主宰）

「急に家庭教師のバイトが入ってしまったから会うのは明日にしよう」。学生時代、こう言って約束を延ばしたことが度々あります。

「バイト」はご存知「アルバイト」。「仕事や労働」を意味するドイツ語の「Arbeit」からきています。戦前に学生の間で使われはじめた隠語。本業である学業の副業として家庭教師などをすることをアルバイトと呼んでいたことから広まったらしいです。

英語ではa part-time job。「パートタイム」は現代用語の一部になっています。また、昨今では「フリーター（freeter）」という言葉も生まれました。多様化する社会の表れかも知れません。

バイトと合羽（かっぱ）

時代をさかのぼり、室町時代にはポルトガルとの交流によって多くの言葉が日本語として定着しました。「雨が降るからカッパを持っていきなさい」。子どもの頃に祖母に言われました。「カッパ（合羽）」はもう死語に近いですが、元々のポルトガル語capaは雨衣だけでなく本のカバーやCDケース、ソファに掛ける布など中身を保護するための覆いを意味しているようです。雨模様の日、今の時代は英語の「レインコート（raincoat）」ですかね。

漢字（中国語）に加えて各国の言葉を貪欲に吸収してきた日本語…習得が世界で最も難しいとされる言語の一つであることを私たちは自覚し誇りを持っていいでしょう。同時に日本語のみならず言葉を大切にしていかねばならないと思うのです。